

都市型生活協同組合員のネットワークとソーシャルキャピタル

中里 裕美

明治大学情報コミュニケーション学部

1. はじめに

本報告の目的は、都市型生活協同組合員がもつネットワークの現状ならびにそれとソーシャルキャピタルとの関連について検討することである。

現在、多くの生活協同組合においては、その事業形態の変化などによって、連帯のあり方がゆらいでいると指摘されている。一般には、都市部の生協では従来のような班活動を中心としたものから個別配送が中心業態となり、組合員間のコミュニケーションは希薄になっているといわれる。さて、その実態はどうなっているのだろうか。

本報告では、パルシステム千葉の組合員を対象に実施した「組合員の社会とのつながりや生活に関する調査」から得られたデータ分析を通して、1) 組合員がもつ「普段の生活で気にしていることがら」を相談できる相手のネットワークの現状を明らかにしたうえで、2) そのネットワークの中のどこにパルシステム千葉が位置づけられ、パルシステム千葉が組合員のソーシャルキャピタル醸成や活用においてどのような機能を果たしているのかを検討したい。

2. データと変数

2.1. データ

本研究で用いるデータは、立命館大学政策科学部の桜井政成准教授を代表として組織した「地域活性化とソーシャルキャピタル研究会」が2008年6月に実施した「組合員の社会とのつながりや生活に関する調査」から得られたものである。

調査は、生活協同組合「パルシステム千葉」の組合員のうち、習志野、稲毛、千葉の配送センターが管轄する組合員の中から無作為抽出された1000名を対象に行われたものであり、個別配達員を通して質問票を組合員に配布し、郵送回収する方法がとられた。有効回答は322件（有効回収率32.2%）である。なお、本調査は、生協総研研究所の助成を受けて実施されたものである。

2.2. 変数

分析に用いる主な変数は、「普段の生活で気にしていることがら」¹⁾を「話ができる」相手に関する項目と社会参加の度合いに関する2つの項目である。

話ができる相手は、「インターネット経由の見ず知らずの人」「一緒に住んでいる家族」「離れて暮らしている家族」「親しい友人」「隣近所や町内会、地域活動の関係の人」「職場や学校関係の人」「趣味やボランティアなどのグループ・サークル活動の関係の人」「パルシス

¹⁾普段の生活で気にしていることがらとして、質問票では「子育て・教育」「食の安全・安心」「防犯・防災」「家族の健康・介護」「家計」「環境問題」「政治」の七項目について尋ねている。

テム千葉関係（他の組合員や職員）の人」「問題事に関する専門機関の人」「その他の人」のそれぞれについて、「よくできる」「たぶんできる」「おそらくできない」「絶対できない」「当てはまる人がいない」の中から選ぶ質問を設けた。（「その他の人」の項目は分析から除外）。また、社会参加の度合いに関しては、「あなたは過去 5 年間に町内会・自治会の活動に参加しましたか」と「あなたは過去 5 年間に市民活動や住民運動に参加しましたか」という質問に対して「とてもそう思う」「ややそう思う」「あまりそう思わない」「全くそう思わない」の 4 件法によって測定した。

3. 分析

3.1. 生協組合員がもつ相談ネットワークの類型化

まず、「普段の生活で気にしていることがら」を「話ができる」相手について、因子分析を行い、その構造を把握する。因子分析（主因子法、バリマックス回転）の結果、「親しい友人」「隣近所や町内会、地域活動の関係の人」、「隣近所や町内会、地域活動の関係の人」、「一緒に住んでいる家族」、「趣味やボランティアなどのグループ・サークル活動の人」、「職場や学校関係の人」からなる第一因子（「居住地域内の、個人的な相談相手」と命名）、「問題事に関する専門機関の人」、「パルシステム千葉関係（他の組合員や職員）の人」からなる第二因子（「システム・制度的な相談相手」と命名）、「離れて暮らしている家族」、「インターネット経由の見ず知らずの人」からなる第三因子（「居住地域外の、個人的な相談相手」と命名）の三因子構造が確認できる（表 1）。

表 1 「普段の生活で気にしていることがら」を「話ができる」相手の因子分析結果

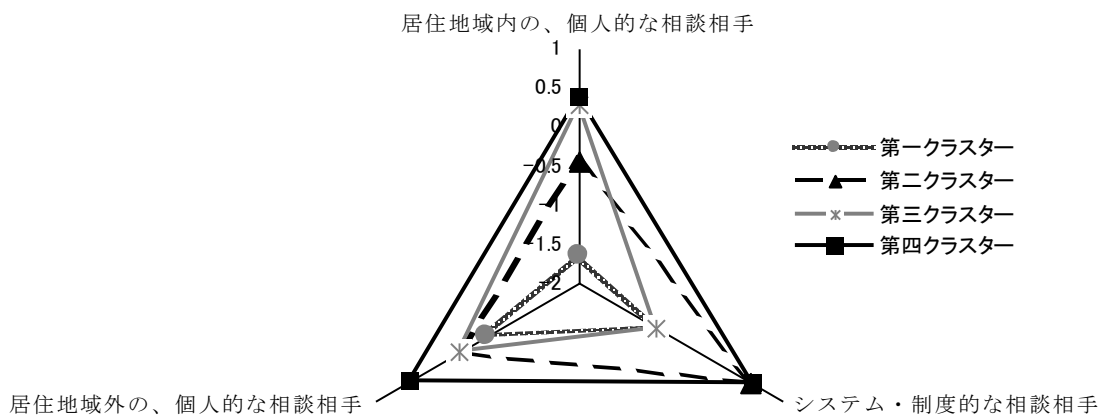
	I	II	III
親しい友人	0.59	0.10	0.14
隣近所や町内会、地域活動の関係の人	0.55	0.35	0.10
一緒に住んでいる家族	0.45	-0.05	0.28
趣味やボランティアなどのグループ・サークル活動の人	0.43	0.39	-0.04
職場や学校関係の人	0.36	0.28	0.28
問題事に関する専門機関の人	0.01	0.71	0.31
パルシステム千葉関係（他の組合員や職員）の人	0.23	0.60	0.16
離れて暮らしている家族	0.30	0.18	0.46
インターネット経由の見ず知らずの人	0.05	0.13	0.44
寄与率	33.08	12.82	11.69

3.2. 生協組合員がもつソーシャルキャピタルとしての相談ネットワーク

これら三因子に表される相談相手をもつ人が生協会員内でどのように分布しているのかを調べるために三因子の因子得点に対してクラスター分析を行った。その結果、「居住地域内の、個人的な相談相手」、「システム・制度的な相談相手」、「居住地域外の、個人的な相談相手」を持つ人の傾向は 4 群のクラスターに分類できることがわかった（下図）。

まず、第一クラスターは、「居住地域内の、個人的な相談相手」、「システム・制度的な相談相手」、「居住地域外の、個人的な相談相手」いずれも低く、そもそもあまり「普段の生

活で気にしていることがら」を他人に相談しない人のグループ、あるいは相談相手のネットワークをもっていない人のグループであるといえる（ケース数 22; 8%）。次に、第二クラスターは、「システム・制度的な相談相手」への相談傾向が強いグループであるといえる（ケース数 63; 22%）。第三クラスターは、「居住地域内の、個人的な相談相手」への相談傾向が強いグループである（ケース数 88; 31%）。最後に、第四クラスターは、「居住地域内の、個人的な相談相手」、「システム・制度的な相談相手」、「居住地域外の、個人的な相談相手」のいずれも高い、積極的に多様な人々に相談をする傾向にある、あるいは多様な相談相手のネットワークを持っている人のグループであるといえる（ケース数 111; 39%）。



この四つのグループを、ソーシャルキャピタルの「ブリッジング・ボンディング」、「表出的一道具的」という軸で分類すると（詳細な説明については本報告要旨では割愛する）、第一クラスターは、そもそも他人に相談しない、あるいは相談相手のネットワークを持っておらず、関係性の資本であるソーシャルキャピタルを持ち得ないと考えられる。第二クラスターは、行為者（消費者）と彼／彼女らの所属する社会集団外の人々との間のネットワークを有し、そこで自分が必要な資源を獲得していることが推測される。第三クラスターは、主に居住地域内に相談ネットワークを持っていることから、地域内の人々との同質的な結びつき（ボンディング型）を有し、ここでは諸資源の維持が目的となる。第四クラスターは、第一クラスターとは逆に、多様な相談ネットワークを持っており、4種類全てのソーシャルキャピタルを持っていると考えられる。

つまり、組合員のもつ相談ネットワークとしてのソーシャルキャピタルのうち、最も多いのはブリッジング・ボンディング、表出的・道具的機能を兼ね備えた豊富なソーシャルキャピタルをもつ人々（第四クラスター）であり、いずれの型のソーシャルキャピタルも持たない人々（第一クラスター）は全体の約 8%しか存在せず、少数派である。

3.3. 生協組合員がもつネットワークとソーシャルキャピタルとの関係

次いで、クロス表分析により相談ネットワークに関する 4 群のクラスターと行動・認

知レベルのその他のソーシャルキャピタルとの関係を分析する。ここで用いるのは、上述した社会参加の度合いに関する二つの設問である。

分析の結果、相談ネットワークをもたない第一クラスター所属者は、他のクラスター所属者に比べて社会参加の頻度が少ない一方で、第二クラスター所属者は、ほかのクラスター所属者と比べて社会参加の頻度が高く、それゆえ社会参加という行動面でもソーシャルキャピタルが高いことが分かった。また、「居住地域内の、個人的な相談相手」への相談傾向が強い第三クラスター所属者が、町内会・自治会への参加には積極的なものの、市民活動や住民運動への参加には消極的な点も特徴的である。

加えて、他者への信頼や安心という認知的なソーシャルキャピタル (Uphoff, 2000) に関して、「あなたは、近隣の人々や地域自体に対して信頼感を持っていますか」、「あなたは、近隣の人々や地域自体に対して安心感を持っていますか」という設問についてもクロス表分析を行なった。その結果、社会参加の度合いと同様に、相談ネットワークをもたない第一クラスター所属者は、他のクラスター所属者に比べて近隣の人々や地域自体への信頼感・安心感が低いことが分かった。その他のクラスター所属者はいずれも、信頼感・安心感の双方について「とてもそう思う」と「ややそう思う」の和が 70%を超えており、高い認知的ソーシャルキャピタルを醸成していることが伺えるものであった。

4. おわりに

本報告要旨では、都市型生活協同組合員がもつネットワークの現状ならびにそれと行動・認知レベルのその他のソーシャルキャピタルとの関係を大まかに検討した。その結果、パルシステム千葉は、相対的に家族や友人、地域内の人々と結びつかずに生活する組合員にとってブリッジング・道具的なソーシャルキャピタルを醸成し、活用するものとして機能している（第二クラスター）一方で、より多くの組合員にとって、家族や友人、地域内の人々との強く、ボンディング型で、表出的な結びつきと違和感なく両立するものとして、あるいはそれらの結びつきを強化するものとして、ブリッジング・道具的なソーシャルキャピタルの醸成・活用手段になっていることを伺い知ることができた。より詳細な内容については大会当日に報告したい。

【参考文献】

Uphoff, N. (2000) "Understanding Social Capital: Learning from the Analysis and Experience of Participation," In P. Dasgupta and I. Seregeldin (eds), *Social Capital: A Multifaceted Perspective*, Washington DC, The World Bank.

協同組合と地域社会研究会(2009)『協同組合と地域社会の連携—ソーシャル・キャピタルアプローチによる研究』

西城戸誠・角一典(2009)「生活クラブ生協の「共同性」の現状と課題— 戸別配送システム導入および組織改革後の生活クラブ生協北海道の事例を中心として」『年報社会学論集』 22,150-161.